

門松考

吉川正倫

序

門松は正月につきもののシンボルである。昨今、門口に飾るのは百貨店の入口ぐらいで一般の民家にあっては紙に印刷した松の絵を貼る位のことであり、門松の存在意義は、すっかりうすれ且つ形骸化し、何れはその形体も消失してしまうのではないかとさえも思われるようになってきた。

門松が鏡餅や雑煮と同様に年始に祝うべきものというだけで、それがなかったら新年を迎えられぬというのであれば消失もまた止むなしと思われるが、元来門松はモンのマツでなくて、カドのマツ、カドマツであったこと、また、門やカドに意味があるというよりも松にその意味があったということを通じて、門松のもっている性格を民俗学的に解明しようというのが、この論のねらいである。

一、カド松

農家でカドというのは、門のことではなくて家の外ではあるが、屋敷の内で麦や稲を干す広庭のことであった。

参考迄にニワといえば庭のことではなくて、家の中の土間のことであり、土間とは言っても埃一つ立てないよう、しっかり踏み固められて入念に掃除がされ、雨天や冬場、あるいは夜間に、脱穀乃至は縄ないの農作業を行う所である。

カドに門という字を宛てるのは、家の入口ということからであろうから、余り責めることも出来ないが、それでも門といえば、門柱乃至門構えの扉をさすように文字から理解されるため、明治以降、都市化が進み、また文字から知識を得る人が増加するにつれて、カド松もモン松も同

門 松 考

様に解することになったのである。

従って、門柱によせて、一對のカド松をたてるというのは、必ずしも本意ではなく、カド松は、家の前庭（カド）に立てる松のことであつたと解される。

門松を立てる場所なり、立て方などについて、全国各地から寄せられた資料に基いて検討してみるに、

① 家、屋敷の入口

山形県庄内地方では、カドバヤシと呼び、必ずしも松ではなく、檜や椿やタラの木がたてられる。場所も必ずしも門口でなく、各家毎に邸内でその年の明きの場所（恵方、吉方といって暦で定まっている）に立てる。

愛知県北設楽郡では、カドガミ様といい、松のほか竹、榊、その他の木をかざる。門飾を門神柱と呼ぶところもあるが、門神は、門口を守る神ではなく、やはり正月の神様のつものようである。この門神柱というのは、高さ三米以上の栃木、または杉木で、でこれに松、竹を添えたり、また藁で作ったお椀形のヤスというものを結んで供物を捧げている。

② 家 の 中

ア、柱、^{ナゲシ}長押

岩手県や福島県では拝み松といって、家の柱や、茶の間の長押しに釘でうちつけたり、お供え（餅）のお飾りの真中にたてたりする。

また家の大黒柱に、下から七五三に縄をかけて飾り、下に臼を伏せて臼の上に若水桶の柄杓をそえてのせる。若水桶に水餅の一切れを入れる。別に飾も飾る。松には十五枚のご幣を七五三に下げる。（岩手県三戸郡、イハヒノマツ）

イ、カマド（ヘツツイ、クド）

奈良県、東の山中では、クドの側に杭をうち、大きい松をくくって餅を供える。家によっては、クドの側に荒神松を立てて、三方荒神をまつり、毎年、大晦日にとりかえる。

岐阜県益田郡には、家の中央、炉の近くに一本の大きな五階松（枝ぶりが五段階）を立て、その中央の枝には一本の二階松を結び、更にその下枝にも木を結び、それにヤスノゴキをくくりつける。この五階松を年神様と呼び、この木に正月様が降臨されるものと考えている。

ウ、座敷、その他

東北地方に多いが、甕松といい、大きい花瓶にたてたという。

京都、丹波地方や、大阪能勢地方では座敷に米俵を置いて、これに松を立ててお供えをする。

長野県では、年神棚の左右の端に一本づつ松をたてるほかに、中央から少し脇へ寄せて別に一本の松をたて山姥の松という。

三重県では、家の門口の軒先に笑門と書いた札にしめかざりをかけて、左右に松の小枝を飾る。

歳時習俗語彙という書物を片手にして、各地の風習（勿論現在は失われてしまった風習もあろうが）を紹介してみた。

以上によって、まず、カド松といっても、門やカドに限ったことでなく、家の入口から柱、長押、茶の間、台所、座敷、床の間、年神棚と、随分多様に松が飾られる事例があることが分る。

また、所によっては、同じ家で門口にも、台所にも、座敷にも松をかざる所がある。これは、本来の姿でないにしても門松といって、門口に二本一対で、竹と組合せてたてるという定型的なものと可成り意味合いの異なることを示している。

ましてや、松ではなくて、榊や榊の木を飾ることがある等、土地により、家により、外見からだけでも多様である。

松でなければならないとすれば、緑を守る運動の一翼として紙に描いた印刷物を以て辛抱すべきであるかも知れないが、竹、榊その他常緑樹を以て、正月のしるしとするのであれば、形体よりも、むしろ門松をまつる心が問題とらなくてはなるまい。

一、門松をまつる意義

先述の中で注意されることは、岐阜県の事例にヤスのゴキといって、松の木に供物が出来るように、藁で作ったものをくくるということ、及び山形県の明きの吉方に向ってたてるという例が門松の性格の一端を示すことのように思われる。

① 松 迎 え

暮の十二月八日または十三日を事始めと称して、正月の準備を始めるところが多い。

昔は、この準備始めに山に入って松迎えをしたということも、現在は大分遅れて、二十七日か二十八日となっている所が多い。

二十九日になると、九松といたり一夜飾りになるといって忌んだ（信州）。つまり、昔の考えでは、夕日が西山にくだるのを以て一日の始まりとした。従って十二月三十一日の大晦日の晩は、もう元旦になるわけであり、二十九日では、三十日の晩一夜だけになるのをつつしんだものであろう。

二十八日の松迎えは長野県に多くの伝承が残っているが、この松は、どここの山で伐つてもとがめられないという。南北安曇郡地方では、お松様の足を洗うといって、松の根元を三〇センチ程削って白くしておくとか、また家によっては、その木を塩で清める、また、伐る前に洗米を持って行って供える等という。伐つて迎えて来た松は、決して北へ向けて置かない等、死の北枕を忌むと同様の伝承が伝えられ、お松様の腰伸しといい、三十日か三十一日に立てるまで、雪の上に横たえて置くのだという。これを松バヤシといっている所もある。囃す、賑うということからで、伐るといふのを忌んだものであろう。

奈良県山間部では、松と共に山から土を一荷もってきて、割木三本とともに松の根方に置くとともに、新しい砂を、カドの人が通る所にまくという。

松に限ったことではないが、こうして迎えた松や常緑樹を明きの方に向って立てるといふのも新年を迎え、年の神が恵方からやってくるという曆から得た知識でもあったらう。

(1) オヤスと幸木

ヤスノゴキとかオヤスというのは、この家の内外にたてた門松に結びつけた藁製螺旋状の小さい容器である。信州ではオヤスというが、ゴキとかオワン、メシビツと称するところもある。お椀、御器（食器）、飯櫃については説明するまでもないので、オヤスはオヤスのゴキの略であり、オヤスとはオヤシナイ養いから来たものであることは言うまでもなく、神霊に捧げるためのものであるらう。

折口信夫は招かれざる霊をなぐさめるためのものというが、門口にあるオヤスは理解できるが家中の門松のオヤスは説明できない。これも所詮は、迎えた神霊にお供えするための器であったのではなからうか。

この関東から中部、近畿、四国、九州の広い範囲で行われている風習は、少なくとも門松が正月の単なるアクセサリーではなく、この木に神が降臨するものと信じ、その神に対するお供え物であったことを示している。

また門松の根もとを薪でかこんだり、先の奈良県の事例のように、二、三本を松の下に置いたりしている。元来は正月の燃料乃至は年間の燃料が不足しないようにとの祈りの意でもあったろう。

この薪のことを年木、歳木（トシギ）（九州南部）と呼んでいるところでは、門松の前に立てたり、門松を囲んでたてる。また軒の柱に結わえたり、小屋や道具の一つ一つに、小さなトシギを供えているが、ほとんどがしめ縄を結わえたり、松やゆずり葉で飾りつけがなされている。奄美大島から沖縄、また福島県地方では、節木とよび、小豆島等、瀬戸内海東部の島々では、幸木サイギという。また高知県では幸い木サイワといっている。

セツギでは、福島のは正月に焚く柴のことで節季の代表としての正月の燃料だからという意である由。

幸い木という同じ名称でも薪でなくて、家の内庭に横に物干竿のように腕木をつるし、これに正月用の食べ物をかけつらねるのを長崎では「幸い木」という、同じものを高知県では「懸の魚」とか「腕木」とかよんでいる。平年には十二本、閏年には十三本の藁なわで作った吊り手をさげて、その吊り手ごとに、鰯や鰯、あるいは鯉節、するめ、昆布、鶏卵のわらヅト苞を下げ、両端に大根を結び、正月二十日までにしつとりはずして食べ、二十日までには副食物を買わないのを自慢にするところもある。福岡県では、鰯の贈答が盛であって、人目につくように下げておく必要もあったという。

何れにせよ豊富な食料に恵まれて新年を迎える喜びから幸の木と呼んだもののようである。

しかし、島根県のミノグミや関東、長野地方で竿をシメナワ代りにしたものなどは、食物を下げるけれども、これは神へのお供えであるといっている。

どちらが本来の姿であるかについては諸説あるが、シメナワ代りに食物を下げるというのは、和歌山県では、家の中で神棚と別に、正月の神である年神を祀る年神棚のシメ飾りにお供えものを括りつける例もあり、神に捧げたのが本意で、それを少しずつおさがりとして頂戴する風に変化したものとも考えられる。このように見てくるならば、年木、幸木は、神への捧げもの、供え物にねらいがありそうである。

愛知県北部から長野県にかけて、ニウ木、オニ木といって平年十二本、閏年十三本の線を引いたり、十二月という字を書いて薪を束ねて、家の門口に置く風がある。

柳田国男はこれをお新木^{にい}、新木として新しい年木であると解するが、折口信夫は鬼木であり、山人が年の初めに丹生木として里へ持ってきた年占の木が、漸次薪を祝うように考えられてきたのではないかといっている。

幸木とか新木として家の前に飾る薪だけでなく、門松の松を山から引いてくることが、やはり一つの儀式であり、これを松迎えと呼び、一夜松を忌んだことは既述の通りである。この松迎えは、必ず所定の山から迎えねばならないとして、松を背負って下りてくるが、この時に榊、ゆずり葉、椎、栗等、薪も併せて山から選ぶのであって、幸い木が家に到着すると家中のものが門口に出て、これを出迎える習わしが愛媛県周桑郡で見られ、ここでは、幸い木を門松にも供えて、その幸い木を年間保存して大晦日の燃料にするという。

奈良県の大晦日にカマドの側の松をとり代え、一年保存するというのと心が似ているように思われる。

松迎え、幸木迎えの心の中に山の神迎えの礼法がこめられていることを思うのである。

③ 門松の伝説昔話

門松迎えや飾りつけた門松に関する伝説からも門松をまつる意義を考えることができる。

(1) 岩手県、江刺、紫波二郡の昔話（柳田、海上の道所収、鼠の浄土）

谷川の測の水がところ、渦を巻いているのを珍らしく思い、正月の松を刈りに来た爺さんが一束投げ入れたらくるくる廻って入っていくのが面白いので一束、また一束と、一日刈って束ねた門松を悉くこの渦の中へ投げ入れた。

別の話は、山奥の岩陰に小さな洞穴があいているのを見て、こういう穴にはよく悪いものが入っていることがある。ふさいでおいた方がよいと思って柴の一束を以てその穴に栓をすると、栓にはならず穴の中に入ってしまう。そこで一束また一束と刈りとった柴の束を全部穴の中に入れてしまった。

何れも、中から人が出てきて門松の礼を言うと共にお礼をしたいから遊びに来てくれと爺さんを案内してくれた。中は広々とした立派な屋敷で、門を入るとさっきの門松または柴の束が一行に積み上げられており、家に案内されて大変な御馳走があつて帰りには土産に一人の子どもをくれた。これが福の神で忽ち爺さんの家を富貴にしたという。

(2) 柳田、一つ目小僧その他

武州妻沼町の有名な聖天様は、昔、松の葉で眼球を突かれたというので、妻沼十三郷の人民は松を忌むこと甚だしく、庭にも山にもこの木を植えぬばかりか、門松の代りには柵をたて、什器衣服の模様にも一切松を用いず、屋号にも人名にもこの文字を使うことさえ避けるという。

信州、橋場、稻扱では晴明様という易者が、この地に滞在の間、門松で眼をついて大いに難渋をなされ、今後もし松を立てるならば村に火事があるぞと戒められたので、一般に柳を立てることになった。

この二つの事例は、たまたま門松を扱ったものを紹介したに過ぎないが、前者は、大国主命の伝承に、周りを火でかこまれた時、内はホラホラといって、洞穴に命を案内した鼠の話のように幸せをもたらす常世の国、竜宮城へ出かけるのに、門松や薪が媒介となっていること。逆に門松や薪を以て幸せの神を招来できると信じていたことを示しているよう。

後者は片目の魚の伝説でも知られるが目が一つしかないとは思議なもの恐るべきものしるしであって、片目であることを神聖の表徴とする信仰が強く、その原因として種々なものが挙げられるが、ここでは門松をせずに柵をたてたり、柳をたてたりする理由づけに用いられている。門松が松に限ったものでないことは既述の通りであるが、一方では柵や柳をたてる理由づけに、他方に於て神聖との関わりが深いことを示しているといえる。

④ 結びに代えて

正月の神とは

門松の種々相を紹介しつつ、これがやはり正月の神を迎える単なる目印でなく、神霊の宿りたまう、ひもろ木であり、依憑よりましであることを述べてきた。

ここに迎えられる神は歳の神であり、正月の神であるが、穀霊としての農耕神か、或いはその家の祖霊としての祖先神であるかについて諸説がある。

柳田国男は正月と盆のそれぞれの行事の類似から祖先神であろうことを先祖の話その他でふれている。

大阪府能勢町では正月の松迎え、盆の盆花迎えのほかに五月五日の天道花として山つつじを迎えにいくといっている。天道花は赤いつつじの花で、類似花は家の近所にもあるが必ず山つつじでないといけなと伝えている。五月五日は農耕始めの日であり、神社では牛面をつけた人に

よるおん田行事（農耕儀礼）が行われている。

多くの地域では盆棚や墓に供える盆花または精霊花を七月の十一日または十三日に迎えにゆく、桔梗（長野）女郎花（奈良）等、地域によって異なるが山へとりに行くといっている。

村の山へ松や花を迎えに行くというのは、やはり祖霊に関わるのではないだろうか。先祖の霊は山にこもり、個々の墓に祀られても子孫の記憶にのこらない先祖の霊は折々に山を通じて子孫のもとを訪れる。とりわけ農耕にたずさわって多年、心血を注いで丹精した農地にはやはり祖霊が関心をもつものと考えたのであろう。

迎える作法だけでなくミタメノメシといって、東北で大晦日は仏壇に供える飯を盆に作るという。

元来、盆も正月も先祖の霊祭りの機会であり、正月は一年の始まりであるだけにその年の無事息災を念ずる気持がより強く現われ、幸木や幸福をもたらす話などをつくることになったものであろうか。

折口信夫が「歳神は半ば神で、半ば祖先の魂といった形をとる」（年中行事）というごとく、門松の迎え方、飾り方、まつり方、そして最後に十六日のトンドの火で送られる姿まで、盆の行事との類似が濃く、門松に見られる魂まつりの種々相が、門松は単なるアクセサリーでないとを改めて感じさせる次第である。

参照、柳田国男篇 歳時習俗語彙。

（ほか文中に表示。）